

学位請求論文審査報告書

氏名・（本籍地）	小坂 淑子（神奈川県）
学位の種類	博士（人間学）
学位記の番号	甲第124号
学位授与の日付	令和2年3月16日
学位論文題目	体験過程の象徴化における象徴様式の影響に関する研究
論文審査委員	主査 日笠 摩子 副査 内山 登紀夫 副査 柳田 多美 副査 村山 正治

本論文は、心理療法の実践の中で、体験過程の象徴化における象徴様式がクライアントの体験にどのような影響を与えるのかと問題をマルチメソッドで検討したものである。理論的検討に基づき、健康な人のアート表現プロセスの質的研究、臨床事例研究、若年無業者への介入に関する研究を重ねた上で、象徴様式によって体験との「距離」が異なることを主張し、それを考慮することが臨床実践に有効であると考察している。

第1章の「体験過程の象徴化を行う際の象徴様式に関する理論的検討」では、まず Gendlin(1961他)に基づき、フェルトセンス（出来事についての、まだ言葉になっていないが身体的に感じられる意味）を象徴化することが心理療法のエッセンスであり、その際のフェルトセンスと表現を行き来して確かめる作業であるジグザグが重要であることを指摘した。その上で、発達心理学やアートセラピーの理論に学びつつ、象徴様式（直接参照、感覚運動的、相貌的、概念的）の違いによってクライアントの体験との距離が異なるという図式的モデルを提唱している。そして論文全体の目的として、フォーカシング指向心理療法へのアート表現を導入する実践を表現様式と体験との距離という観点から検討することを提起する。

第2章「KOL-BE を用いたフォーカシング体験の特徴」では、まず研究1として KOL-BE というアート表現素材を用いたワークショップを実施しその参加者の感想を質的に分析した。その結果、KOL-BE や視覚的アート表現独自のプロセスを抽出し、フォーカシング体験者は KOL-BE 体験から自然にジグザグが生じ、意味の気づきも起こっていることを明らかにした。研究2では、①フォーカシング初心者の KOL-BE 体験、②フォーカシング経験者の KOL-BE 体験、③フォーカシング初心者のフォーカシング体験を実践的に施行し、3群の比較検討を行った。結論としては、初心者にとって KOL-BE 体験はやりやすいもののフェルトセンスは感じにくいことが示された。ジグザグが起こり意味を見いだすにはフォーカシング学習体験が有効であることが示唆された。

第3章、第4章は、Gendlin の構造拘束という概念を参照しながら、心理臨床場面へのアート表現の導入を検討している。第3章「フォーカシング指向心理療法におけるアート表現の導入」研究3では、外傷性記憶のフラッシュバックに苦しむ複雑性悲嘆の事例に、アート表現を導入したプロセスを検討している。同じ内容が繰り返し語られる構造拘束的な心理状態において、いまここでの身体感覚を視覚的アートによって象徴化できること、さらにそれによって距離をとれるようになるプロセスを描出し、その際に必要な配慮を検討している。

第4章「若年無業者を対象としたフォーカシング指向表現アーツ」では、別種の構造拘束の例として若年無業者を対象として取り上げている。研究4では、若年無業者の就労準備性を支援者側へのインタビューを通して整理し、人間関係を築きつつ能動的に行動すること、情動知能の育成の必要を確認している。研究5ではそのような面を促進する就労準備の研修として、フォーカシング指向アーツのグループワークを実施し、その効果を量的質的に検討している。若年無業者が、人との関わりが断たれた形の構造拘束にあると想定して、まず安全に一人で作業する時間を保証してアート表現を導入することで、それを媒介として言語表現が促されることを見いだした。

第5章「総合考察」では、2章から4章までに取り上げた研究結果を理論モデルと対応させながら再検討し、体験過程を象徴化する際に象徴様式に応じて体験との距離が異なることを示した。そして、アート表現などより具体的な象徴様式での表現を介在することが、ジグザグのプロセスを促進し意味の理解を勧めるためにも、概念的象徴化を促し体験との距離をとるためにも、有効であると考察している。また、臨床場面、特に構造拘束的な場合において、より具体的な象徴様式での介入が構造拘束を緩める上で有効であると主張している。

審査結果の要旨（1200字以上）

本審査の結果、主査・副査一致して合格という結論に達した。以下、評価の根拠を述べる。

第一に、臨床心理学分野の博士論文として、優れた臨床実践研究である点が高く評価された。学術的心理学の狭い方法論に縛られることなく、筆者自身の理論的臨床的基盤であるフォーカシング実践、およびクリニックや若年無業者支援の場での臨床経験に基づいて仮説を立て、それを事例研究・質的研究・介入実践研究によって例証している。量的な検討に加えて、面接資料に基づく質的研究・事例研究・ワークショップによる介入の効果研究等、それぞれの研究対象に適した多様な方法を柔軟に採用し、丁寧に分析している。厳密な統計的研究ではないが、理論と臨床実践に基盤を持ちつつ、臨床的現実的に必要とされ有効活用される研究結果につながっている。心理臨床家が行う臨床心理学研究スタイルとして高く評価できよう。

第二に、予備審査の結果報告で求められた修正要求に、短期間に適切に対応した点も評価された。特に、博士論文全体としての目的を最初に明示して、総合考察でも統合的な考察を行ったことで、博士論文として形式的に整合性のあるものに改善された。

第三に、内容的には予備審査でも述べたとおり、1) 象徴様式という概念を提出して、理論実践を整理する新しい視点を提供した点、2) 象徴様式の違いによる距離化という観点を取り入れた仮説形成が有効であることを質的研究や事例や介入実践を通して示した点、3) 若年無業者という今日の問題に対して介入の可能性を示した点で、新奇性や実用性が認められる。

第四に、構造拘束の状況に対して新しい象徴様式を導入することの臨床的な意義は本論文でも示されているが、今後の研究や臨床実践の展開の芽が豊かにあることも評価された。本人も今後の課題としてあげており、さらなる研究の展開が期待される。

人間性心理学領域の審査員は上記のように高く評価したが、領域以外の副査からは、いくつか課題も指摘された。一つは、総合考察の最後の「象徴様式による体験との距離を考慮する意義」の論述が本論文の要であると思われるにも関わらず、その論述が不十分ではないかという指摘である。本論文では、体験との距離がとれることが望ましいという結論になっているが、心的外傷では距離を取ることが解離という症状につながる。実は距離をとれることではなく、柔軟に距離を行き来ができることの方が適応的なものかもしれない。このような点での議論の不足が指摘された。

もう一つは、Gendlin の構造拘束や体験過程の進展の概念は興味深い、トラウマ、悲嘆、若年無業者の状態における発達障害の有無等、それ特有の症状への考慮が不足しているのではないかと指摘があった。Gendlin の理論的枠組みでの心理療法プロセスとしては妥当かもしれないが、この主張を、理論的枠組みを共有していない他流派も含めた臨床心理学全体に理解されるように伝えるには、工夫が必要であるという指摘である。

Gendlin は、心理現象の内容ではなく、その変化のプロセスに注目するという独自の哲学的理論化を行った。この理論的枠組みを一般に伝えることは Gendlin 自身やフォーカシング指向の多くの著者が格闘してきた点である。理論的基盤を共有する主査は、小坂論文は、他流派に Gendlin 理論とその実際を理解してもらうための着実な一歩であると評価しており、今後の展開も期待している。

最後に、本論文の公開に関して付記しておきたい。本論文の一部はすでに大正大学臨床心理学専攻紀要、大学院研究論集に投稿し掲載されている。また4章の一部は「若年無業者の職業準備性を支援者はどのように評価しているか」として産業カウンセリング研究に投稿され、産業カウンセリング学会の学術賞を受賞している。今後、第1章「体験過程の象徴化を行う際の象徴様式に関する理論的検討」および第2章第3節「KOL-BE とフォーカシングの体験プロセス及び効果の検討」は人間性心理学研究、3章「フォーカシング指向心理療法におけるアート表現の導入」については心理臨床学研究、第4章第2節「若年無業者の就労支援におけるフォーカシング指向表現アーツのグループワーク」については産業カウンセリング学会への投稿を予定している。なお、博士論文全体は上記学会誌の掲載の後に、書籍という形で出版する予定である。

原著であることを求められる学会誌での公開予定があることに加えて、第3章第4章の臨床研究がインターネット上の公開は倫理的に望ましくないという理由のために、博士論文全体のディボトリーでの公開は避け、要旨のみの公開にすることを求めたい。

公表予定

日 程	令 和 年 月 日
公表形態	① 掲載誌名：【 】【 】号・巻 【 】頁 【全文・要約】
	② 単著（発行者）
題 目	<※タイトルを変更した場合>